



浄土真宗の第8代宗主・蓮如上人のことばに、次のようなものがあります。(御一代聞書52条)

## 信のうへは うれしくいさみて申す念仏なり

(他力の信を得た人は、うれしく精を出して念仏するものである)



ここで「念仏」といわれているのは、口に念仏申すことだけを指すのではなく、「**念仏と共にある生活すべて**」を指すとも言われます。

では「念仏と共にある生活」とは何でしょうか？ 浄土真宗の僧侶で、東大教授も務められた早島鏡正さんは、次のように表現されています。

私はよくたとえ話として、われわれ我執(註；自分中心の心)の持ち主であることを「我尺を使う」と表現します。自我のものさしを我尺というのです。…よくよく考えみると、自我の執着、つまり我執というものさしを皆さんもっているから、人間の数だけ、この世の中には我尺(自我のものさし)が存在します。そして、人によってみな目盛りが少しずつ違ってきます。…

念仏のものさしは、仏さまの智慧、仏智そのものものさしであって、だれが使っても同じ目盛りなのです。…ですから、折りにふれて「我尺」を使う度数よりも「仏尺」を使う度数がだんだん多くなると、家庭の中もなごやかになる。…



腹がたって相手をぶとうとするとき、「待てよ、おれはこういう我執の持ち主だったなあ。だが、念仏にはそういう我執をうちくたくはたらきがあると説かれている。それなら念仏の心を味わいなおしてみよう」と思って、仏法に立ち戻り、仏智に立ち戻ることをすすめているのです。

『蓮如 ～その教えと生き方～』 早島鑑正 著より

私たちは、「我執」を捨てることはできません。捨てられなくとも、「南無阿弥陀仏」に出会い、この迷いの命(生老病死の苦悩)が必ず救われると聞いていくことで、心の安らぎを得ることができます。この安らぎを「安心(あんじん)」といい、「他力の信」といいます。「他力の信」があつてこそ、私たちは苦悩の日々を「いさみ(喜び・いそしみながら)」歩んでいけるのではないのでしょうか。

信心をいただいた人はこういうすばらしい、いそいそと生活をさせていただくことができる。念仏もいそいそと称えさせていただくことができる。私が散歩に行くのも旅行に行くのも、レストランに食べに行くのも、私のいそいそと生活するすがたである。…

生活の一部が念仏生活ではなくて、生活全体が念仏生活であります。

慧日山 真光寺

